

第291回 令和8年9月15日（火）

「やめるということについて」

時間にも人間にも容量があります。容量を超えて物事に取り組むとどこかで無理が来ます。そのときには何かを捨てなくてははいけません。

私自身で考えると、教員になった当初はバスケットボールの指導にのめりこんでいました。指導書やDVDにお金を惜しげ無くつぎ込んでいましたし、指導にかける時間は多くのものを犠牲にしていたのですが、それに疑問は感じませんでしたし、後悔もありませんでした。

人生の節目にふと考えることがありました。このままで良いと思う自分もいましたが、新しいことにチャレンジし、本や旅で新しい生き方を見つめなおす機会があってもいいかもしれないと思うようになりました。

ベンチを離れ、管理職として働くことになったのは50代に差し掛かった時です。この選択が正しかったかどうかはわかりませんが、世界が広がったことは確かだと思います。

人生には自分から見たブルーオーシャンがあります。生き慣れたルーティン生活のほうが居心地は良いのですが、人生は一度しかないので様々な経験をするのは、たとえ失敗したとしても大切なのではないかと考えました。

バスケットが無くなった自分を想像することはできなかったものの、実際に新しい環境に飛び込んでみて見えなかったものをたくさん見ることができました。

次の転機は教育という現場から離れる時かもしれません。果たしてそれができるのかどうかわかりませんが、終身雇用でずっと学校に携わっていたので、チャレンジしてみたいことはたくさんあります。

「手放す、やめる、捨てる」ことについて日本人は特にネガティブに考える傾向があります。ジョブ型社会になって、転職に抵抗がなくなってきたものの、外国に比べると日本人は環境を変えることが苦手です。

時間も容量も空きがないまま、新しいことを次々に増やすことはリスクがあります。精度も落ちますし、健康にも悪影響を与えかねません。せっかくチャレンジするのなら、しっかりと環境を整えたほうが良いのではないのでしょうか。

心配するよりやってみたら案外すんなりできたということはたくさんあります。